

2022年1月8日（土）上演②

山梨県 甲斐清和高等学校

「きみにもわかる」

第57回関東高等学校演劇研究大会（東京会場）

生徒講評委員会 講評文

生徒講評委員会 担当委員

網 寧々花（東京都国立学芸大学附属高等学校2年）

文芸部員の大土まことが自分の小説を通しつつ、他の二人の部員と関わっていくうちにちょっとだけ変わっていく青春脱力劇であった。

この作品にはこの高校の演劇部員のやりたいことがぎゅうぎゅうに、これでもかと詰め込まれているような気がした。メタ発言、パロディ…などなど終始好き放題やっているのであるが、彼らのやりたいことはきちんと講評委員に伝わり、観劇後の討論も大変盛り上がった。

講評委員から好評だったのは音源だ。普段はこれでもかというほどゆるいゆるいテイストなのに、「ラブストーリーは突然に」が流れ出したのにはものすごいセンスを感じた。

加えて、パロディネタは評議員の中でもオタク層にガッチリハマった。登場人物たちもキャッチーで少しアニメっぽく、「アニメを見るような感覚を受けた」と言っていた講評委員も少なくなかった。

そして、散りばめられたエッセンスの一つがSDGsであるのもまた彼らの“ゆるさ”を助長していた。SDGsというのは正直、今高校生が頑張っ解決できるような事象ではない。それをこの劇のメッセージ性として取り入れるのは些かおかしくもあるのだが、そのおかしさこそが魅力なのであろう。

また、最後まで謎の“ナレーター”の存在がこの劇を盛り上げている。彼はいったいいつ出てきて何を言い、何をして去っていくのか…。もっとも予測不可能で意味不明な彼は会場を笑いの渦に巻き込んだ。

ここまでその雰囲気や展開について触れてきたが、そんな中での確かな技術と熱量も感じられた。特にひどい風の中を進むシーンではその身体表現の技術や大道具を揺らすと言った発想には度肝を抜かれた。

この作品は「高校演劇」のお手本、というより「高校演劇部」のお手本のような作品である。部員の好きなことや自分達らしい雰囲気を表現しているのにとっても惹きつけられたし、何より役者全員が楽しそうであった。きっと部員の皆さんは登場人物のように部活が大好きなのであろう。そんな姿を楽しく微笑ましく見られたし、自分ももっと演劇を楽しもうと思わされた。

山梨県 甲斐清和高校演劇部の皆さん、楽しい時間をありがとうございました。

